

中高一貫教育制度導入の可能性 検討資料（第一次導入候補校を中心に）

1 第一次導入候補校に係る論点（第1回部会）

論点1 併設中学校の通学区域（学区）

- 併設中学校の通学区域は、高等学校の通学区域（調整区域を含む）に準ずることが望ましいのではないかと。
- ※高等学校の通学区域以外の例として、「地域枠」と「県外枠」がある。

論点2 併設中学校・高等学校の教育課程

- 第一次導入候補校では、大学受験に対応するために学習進度を優先するのではなく、「探究的で深い学びによる中高一貫教育」とすることが望ましいのではないかと。

⇒（事務局案）

2ページ以降を参照

論点3 併設高等学校における学級の混合時期

- 各校の状況に応じて、内進生と外進生の混合時期を決定することが望ましいのではないかと。教育内容等によっては、内進生のための類型やコース、学科を設置することも考えられる。

論点4 併設中学校における教員の配置

- 併設中学校には、中学校の免許を持つ高等学校の教員を配置することが望ましいのではないかと。
- あわせて、2023年度から、中高交流人事により、中学校の免許を持つ高等学校の教員が、中学生を指導できる体制を構築していく必要があるのではないかと。

⇒（事務局案）

- 開校当初は、市町村立小中学校から派遣された教員と、中学校の免許を持つ高等学校の教員とで構成する。
- 2023年度から、中高交流人事を一層進め、中学校の免許を持つ高等学校の教員が、中学生を指導できる体制を構築していくとともに、中高一貫校で勤務する教員の採用枠を設け、市町村立小中学校から派遣された教員の割合を、段階的に減らしていく。
- また、市町村立小中学校から派遣された教員は、一定年数を経過した後、市町村立小中学校に戻る。

（参考）教科別の教員配置イメージ

区分	主要教科					技能教科				計
	国語	数学	理科	社会	外国語	保体	音楽	美術	技家	
市町村立 小中学校	1人	1人	1人	1人	1人	1人	—	—	—	6人
県立 高等学校	1人	1人	1人	1人	1人	1人	—	—	—	6人
計	2人	2人	2人	2人	2人	2人	兼務	兼務	兼務	12人
週時間	22	22	22	20	24	18	6.6	6.6	10	—

※技能教科（音楽、美術、技術・家庭）は、授業数が少ないことや教員の確保が難しいことから、県立学校や近隣の中学校の勤務者が兼務することを想定。

※道徳・総合的な学習の時間・特別活動は、学級担任が受け持つことを想定。

※週時数は、標準授業時数×2学級

論点5 併設中学校への入学者の決定

- 適性検査と調査書により入学者を決定することとし、面接や作文、グループ討議、抽選をどのように組み合わせるかは、各校の特色等によって決定することが望ましいのではないかと。
- 明和高等学校の音楽科を中学校段階から募集する場合は、実技検査を中心に実施することが望ましいのではないかと。
- また、適性検査や調査書の内容については、今後、検討する必要がある。

2 中高一貫教育の柱となる探究学習の重要性、現状と課題

(1) 探究学習の重要性

- ・グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化など、社会は加速度的に変化しており、将来の予測が難しい社会の中でも自立的に生きていく力が必要である。
- ・実社会では、正解が一つに決まっているケースは極めて少なく、失敗しても、周りの人の協力を得ながら試行錯誤を繰り返し、粘り強く取り組むことが大切である。
- ・そのため、自分で課題を立てて、情報を集めて整理・分析し、自分の考えを述べる「探究学習」を通して、主体的・協働的に課題を解決しようとする力を育むことが重要である。

(参考) 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告) 2016年 文部科学省
「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」報告書 2018年 経済産業省

(2) 探究学習に関する成果・課題

ア 成果

- ・小・中学校では、「アクティブ・ラーニング」の実践が進められ、自分で課題を立てて情報を集めて整理して、調べたことを発表する学習活動に取り組んでいる生徒の割合が増えている。
- ・高等学校では、SSHなどの研究開発校を中心に、探究的な学習が進められている。
- ・高等学校では、総合的な探究の時間の中で、社会に参画して地域の活性化を目指すような取組が行われてきている。
- ・「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」といった探究の過程を意識した取組が行われてきている。

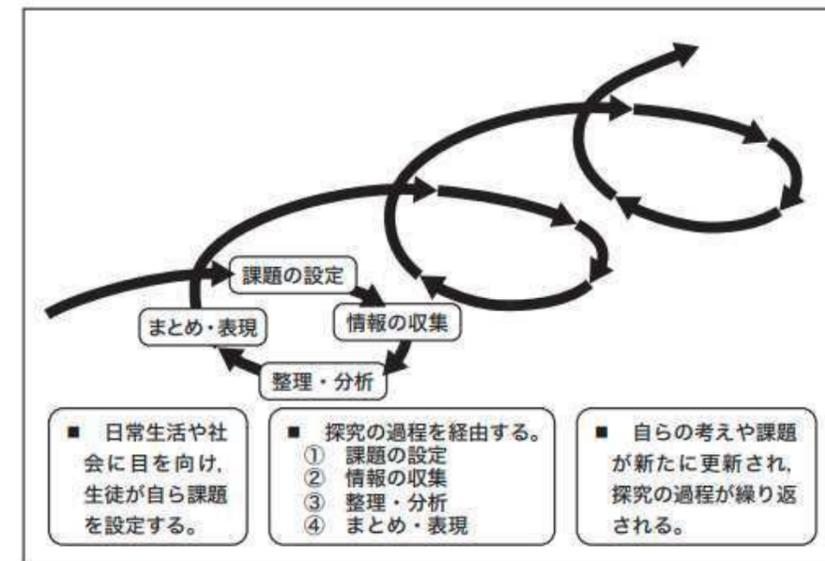
(参考) 中教審教育課程部会 生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ 2016年 文部科学省

イ 課題

- ・一部の学校（特に中学校・高等学校）の総合的な学習（探究）の時間では、ねらいが不明確で、何のために学んだか自覚できていないといった事例が見られる。
- ・集団で調べ、まとめて発表する形を、協働的な学習の成果とすることが見られるため、一人一人の資質・能力の向上をより意識する必要がある。
- ・一部の学校（特に中学校・高等学校）の総合的な学習（探究）の時間では、学校行事の準備や進路指導が優先され、学校行事や補充学習と混同されたような事例が見られる。
- ・SSHなどの研究開発校では、高校1年で、研究手法の学習やプレ研究を行うため、本格的な実験は高校2年からとなる。また、高等学校では、探究が自律的であることが求められており、テーマ設定に時間を要することから、試行錯誤が十分に行えず、探究が深まりにくい。

(参考) 中教審教育課程部会 生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ 2016年 文部科学省

(参考) 探究における生徒の学習の姿



(参考) 高等学校学習指導要領 平成30年告示

(参考) 中学校と高等学校で求められる探究の違い

区分	探究の内容
中学校	・「総合的な学習の時間」では、課題を解決することで、自己の生き方を考えていく。
高等学校	・より探究的な活動を重視するため、学習指導要領の改訂で、「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に、名称変更された。 ・「総合的な探究の時間」では、初等中等教育の総仕上げとして、自己の在り方生き方と一体不可分な課題を自ら発見し解決していく。 ・高等学校の探究では、高度化して自律的に行われることが求められる。

(参考) 高等学校学習指導要領 平成30年告示

- 探究学習を重点的に取り組むことを明確にすることが必要。
- 中学校・高等学校の6年間、ゆとりをもって、探究学習に取り組めるようにすることが必要。

3 第一次導入校における中高一貫教育による探究学習の方向性

(1) 第一次導入候補校における現在の特色ある教育の取組

- 第一次導入候補校では、下表のような特色ある教育に取り組んでいることから、第一次導入候補校の中高一貫教育に、これらの取組を生かしていく。

高等学校	主な取組
明和 (SSH第Ⅱ期 2017～2021の取組)	課題研究(1年・2年)、言語探究・理科探究(3年) 夏の事業(講座・校外学習等)(1年・2年) 成果発表会(3年) 留学生の受け入れ・海外研修 グローバルサイエンス交流会(英語による研究発表)(3年)
津島 (国際理解コースの取組)	海外高校とのオンライン交流 小学校での英語の出前授業 地元の祭りのアナウンスボランティア
半田 (SSH第Ⅱ期 2018～2022の取組)	探究(1年・2年・3年) 国際交流事業(1・2年) サイエンスコミュニケーション(講演会等)(希望者) 1・2年合同探究発表会(1・2年) 知多地区生徒探究発表会(3年)
刈谷 (SSH第Ⅱ期 2016～2020の取組)	課題研究(1年・2年・3年) 東京大学特別研究・名古屋大学特別研究(希望者) ポスターセッション(全学年) 刈高サイエンスマッチ(1・2年) 全校英語発表会(3年)

(2) 中高一貫教育による探究学習の方向性

- 現在、SSH等で取り組んでいる探究学習を深めるため、高等学校の探究学習の基礎を、併設中学校の教育活動(総合的な学習の時間や学校設定教科)に取り入れる。
- 生徒がじっくりと探究テーマを探し、実験で試行錯誤する、テーマを途中で見直すなど、長期間にわたる自律的な探究学習を行う。



「失敗を恐れず、粘り強くチャレンジし、周りの人と協力しながら自ら課題を解決していく力」の育成を図る。

＜併設中学校に取り入れる取組の例＞

- ① プレゼンテーションやディベートなど、探究学習に必要な基礎力を育成する。
- ② 本格的な研究の前に行うプレ研究に取り組みせ、高等学校の早い段階から研究を進められるようにする。
- ③ 大学や企業への訪問や、高度な実験・実習の体験、国際交流などを通して、知的好奇心や探究心を高めるとともに、中学校段階から自分の探究テーマをじっくり探して高等学校の早い段階にテーマ設定できるようにする。
- ④ 高校生の活動(SSH成果発表会や国際交流事業等)に参加して、探究学習への意欲を高めるとともに、見通しをもった探究学習が行えるようにする。

探究学習のイメージ(例)

基礎期		充実期		発展期	
中1	中2	中3	高1	高2	高3
①プレゼンテーション・ディベート等 基礎力の育成			研究手法 (論証等) の学習		
職場体験等		②プレ研究 ・発表	研 究		まとめ ・発表
③大学・企業への訪問、高度な実験・実習 の体験、国際交流等			大学・企業との研究、国際交流等		
④高校の活動に参加			中学生への説明・発表等		

- 津島高等学校では、国際交流活動や探究学習の基礎を併設中学校の教育活動に取り入れるとともに、国際バカロレアの趣旨を踏まえた探究的な学びを実践することで、SSH事業実施校とは異なるタイプの探究学習を追求する。